

旅夜懷を書す

細草微風の岸

星垂れて平野闊く

名は豈に文章もて著われんや

飄々として何の似る所ぞ

杜

危檣独夜の舟

月湧いて大江流る

官は応に老病にて休むべし

天地の一沙鷗

甫

【作者】杜 甫(七一二〜七七〇年)盛唐の詩人。字は子美。居処によって、少陵と号する。工部員外郎という官職から、

工部と呼ぶ。晩唐の杜牧に対して、老杜と呼ぶ。さらに後世、詩聖と称える。鞏県(現・河南省)の人。官に志すが容れられず、安祿山の乱やその後の諸乱に遭って、流浪の一生を送った。そのため、詩風は時期によって複雑な感情を込めた悲痛な社会描写のものになる。

【語釈】 *危檣…高い帆柱。 *大江…長江のことを指す。 *豈…「〜だろうか、いや〜でない」と反語の意味。

*飄飄…さまよう様 *沙鷗…砂場にいるかもめ

【通釈】 小さな草が、かすかな風にたなびいている岸边、高い帆柱のある舟に乗って、一人で夜を過していった。

星は広大な平野に垂れるように輝き、月は水面に映って長江は流れている。

人の名声は、どうしてその人が書いた物によつて表れるものだろうか、いや違う、名声は官職であげるものだろうか、年老いて病気がちになれば辞するのが当たり前だろうか

さまよっている様は何に似ているのだろうか、それは天地の間を飛ぶ、砂場にいる一羽のかもめのようなだ